

Title	聖母奇跡譚の「舌不朽縁」
Sub Title	Sur un motif des Miracles de Notre Dame
Author	平林, みどり(Hirabayashi, Midori)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.218(139)- 229(128)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0229

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖母奇跡譚の「舌不朽縁」

平 林 み どり

『教父伝』(*La Vie des Pères*)は最大で74の逸話を含む宗教小話集であり、その核となる最初の42話は13世紀前半にフランスで書かれたと考えられているが、そのうちの9話が聖母奇跡譚である。この小論では第14話の *Ave Maria* 及び他の聖母物語集にある類話について、中国の『法華伝』等との比較をまじえつつ考察していきたい。

I

『教父伝』第14話は以下のような物語である——

たいへん貧しくて、日々の糧も物乞をしなくては得られない学僧がいた。ほとんど字も読めないが聖母のことを心から崇敬していて「食べている時と寝ている時の他は常に『天使祝詞^{アヴェマリア}』を唱え続けて(…ja de dire ne cessast / s'il ne dormist ou ne manjast)」いて、「他のどんな仕事もしなかった (nule auter oevre ne fesoit)」。その学僧がある場所で殺されてしまい、道端に埋められる。

ある日、学校へ行く途中の学僧見習いの子供がそこを通りかかると、世にも美しい一輪の百合が咲いており、地面に「天使祝詞」が金色の文字で書き記されていた。かけつけたその子の先生は、芳香を放つ季節はずれの百合を見て恩寵のしるしであると確信する。村人たちや、司教をはじめとする聖職者らもやって来て掘り返してみると、百合は死んだ僧の遺体の口から咲いており、その「唇は完全なままで、舌は瑞々しく、鮮紅色をしていた。それはたいへんな奇跡だった。というのは遺体の他の部分は腐敗し

てしまっていた (La bouche tot entor avoit,/et la langue, freche et vermeille, /dont mout lor vint a grant merveille,/qar li sorplus porritz estoit)」からである。その学僧の生前を知る者がいて、彼がどれほど聖母に祈っていたかを語ると、人々は「花と遺体をまるで聖人の遺体のように高く捧げ持って (et flor et cors en aportherent/si hautement com un cors saint.)」教会まで行列して行き、盛大なミサの後、聖母の祭壇の前に埋葬した。

いつも「天使祝詞」を唱えていた僧の死後、その舌に奇跡の現れる話は2系統あり、いずれも多く多くの聖母奇跡物語集に見出される。ここでとりあげるのは「僧は死んでしまうが、後に舌に起こった奇跡によってきちんと葬られる」という型で、HM⁽²⁾と呼ばれる、12世紀初頭にラテン語で書かれた最も古い聖母奇跡集に遡れる(HM3)。今一つは「僧が溺死するが、舌の上に彼の最期の言葉であるアヴェマリアが書かれていた為、聖母のとりなしで生き返って贖罪をする」という型⁽³⁾で、HMより少し後にできたTS⁽⁴⁾を原拠とする(TS8)が、この型はHM2(溺死した僧が聖母のとりなしで生き返る話⁽⁵⁾)とHM3自体か、少なくともその逸話を構成する元となった舌に関する何らかのエピソードが結合してできたものと考えられる。

さて、前者の型の逸話であるが、フランス語の韻文で書かれたものは、大きく次の3種に分類される。

- (1) 『教父伝』n°14の逸話。『教父伝』の後の加筆部分であるn°57もほぼ同型であるという。
- (2) HM3⁽⁶⁾及び2種のバリエーション⁽⁷⁾。主人公は「放蕩だが聖母を崇敬する学僧」。殺されたり、溺死したりして墓地の外へ埋められるが、30日後に他の僧の夢に聖母が現れ、きちんと埋葬してやるよう命じる。地面の金文字はなく、花の名前は限定されない(2種のバリエーションでは1本あるいは3本の百合)が、舌だけが損われず残っていて、見ている「人々にはその舌がまだわずかに動き、イエスキリストとその優しい母にあいさつをしている(=「天使祝詞」を唱えている)ように見えた(chascun samb-

loit et ert avis/Qu'encor un peu se remuast/Et qu'ele encore saluast/
Jhesus Crist et sa douce mere.⁽⁸⁾」。B.N. fr. 818 n° 19では、舌の上に
金文字でアヴェマリアと書かれていた。

- (3) 不品行だが聖母を崇敬する僧が、泥酔して悪魔に水中へ落とされ「突然死する (est mort de mort subite⁽⁹⁾)」。仲間たちは墓地の外へ埋めるつもりでいたが、死んだ僧の口の中に非常に美しい文字で「天使祝詞」の書かれた書きつけ (bref) がはいていたので、きちんと共同墓地に埋葬してやった。僧が蘇生しない点を除けば、むしろ TS 8 のバリエントと言える逸話である。

註にあげたとおり、数の上では(2)型が圧倒的に多く、(2)(3)の他、HM 2 や TS 8 も「不品行だがいつも『天使祝詞』を唱えている僧」が主人公であることから、先行するラテン語文献もなく、一番成立年代の新しい(1)型は、他の型の逸話を下敷にして書かれたバリエントに見えるかもしれない。しかし、「聖母だけは敬う僧」、「夢に現れた聖母のお告げ」、「聖母や天使対悪魔の魂の奪い合い」等、聖母奇跡譚の典型的な枠組をはずしてみると、HM2 及び TS8 の原話として「溺死しかけて聖母に救われた僧」、HM3 の原話として「いつも『天使祝詞』を唱えていた僧の舌が死後も朽ちずに残り、祈りが花になった話」がそれぞれ推定できるのではないだろうか。そして後者はむしろ『教父伝』の逸話に近いものだったのではないだろうか。

II

ヨーロッパの文献には死んだ僧の舌に関する逸話で HM 3 より以前に遡れるものは今の所ないのであるが、日本の仏教説話には同じモチーフが見出される。『日本靈異記⁽¹⁰⁾』下巻「憶持法華經者舌著曝髑髏中不朽縁第一」(『今昔』巻十二第卅一も同話)、『今昔物語集⁽¹¹⁾』巻七「震旦法華持者現唇舌語第十四」、同巻十三「一叡持經者、聞屍骸誦誦音語第十一」の3種で、同じ話が『法華驗記』『古今著聞集』などいくつかの説話集にとり上げられている。いずれも「常に法華經を唱えていた僧の舌が、死んでも朽ちずに残って誦經し続ける」話であるが、題名からわかるとおり、日本を舞台と

した2話は、髑髏が誦経するという点が感動の中心となっている。

これらの話の出典として「日本古典文学大系」の『靈異記』『今昔』は、中国の『法苑珠林』、『三宝感応要略録』をあげ、原拠は梁の『高僧伝』であるとしているが、辻英子氏は『芸文』19号所収の論文⁽¹²⁾で、『靈異記』の話により近い逸話として、唐の僧惠禅の手になる『弘贊法華伝⁽¹³⁾』巻第七釈慧向の逸話をあげておられる。先の『教父伝』第14話の原話を考える上で、たいへん興味深いものなので、梗概を記してみる。

「省事務。唯誦法華。」という生活を送っていた釈慧向という名の僧が死亡し—(中略)—ある場所に葬られる。樵人が偶然とおりにかかると、「時有聞誦経声。不知的在何処。」というわけで、役人に知らせ、その場へ同行すると、墓の傍らを通った時に「見一茎蓮華。生於陸地。」不思議に思って村人に尋ねると、そこは慧向師の墓で、僧はまだ生きて法華経を誦しているという。掘り返してみると、「其舌如旧。紅赤柔軟。」で、蓮華はそこから生えていた。この靈異は帝に奏上され、その場所に七層の塔が建てられた。

『弘贊法華伝』には、他にも5世紀から7世紀にかけての「法華経信仰に篤かった人の舌が死後も生きながらえて誦経した話⁽¹⁴⁾」が多く収められている由だが、土葬されて「唯舌鮮好。余皆朽尽。」(史阿誓)というものの他、「以火烧身。乃於灰中。得舌一枚。巖然不壞。」(釈道正)と、火葬された遺体の舌だけが残るといった話もいくつか見られる。誦経するのは髑髏ではなく、舌の方なのである。

一方、大系本『靈異記』が原典としてあげている『法苑珠林⁽¹⁵⁾』巻第十八感応縁では、舌は必ずしも死後も誦経するわけではなく、「余體並骨 唯舌不朽矣。」と、あくまでも舌の朽ちないことが中心となっている。『今昔』巻七の靈旦の話(第十四)の原典もここにある。この話では、地面を掘っていた人が、偶然「如両唇 其中有舌鮮紅赤色」という物体を見つけ、それが法華経を数多く誦したために朽ちなかった唇と舌だということがわかり、人々が周りをとり囲んで誦経すると「此靈唇 一時鼓動。」つまり、まるで経と一緒に誦しているかのように、経に合わせて動くのである。ここでは声は出てこない。

以上、中国における「舌不壞」の逸話に関しては、偶々目に入ったものをとり上げたにすぎず、全体像は把み得ないが、次のことは言えるのではないだろうか。第一に、日本では「鬮髑誦経」と呼ばれているこの型の逸話の感動の中心は舌にあるということ、第二に、一番古い「舌不壞」の逸話は5世紀に遡れるらしいということ、第三に、釈慧向に関する『弘賛法華経』の記事は、比較的単純な『法苑珠林』等のものに比べて、説話としての完成度が高いのではないかということである。そして、先にあげた『教父伝』の逸話は、これに細部に至るまで非常によく似ているように見える。

III

聖母奇跡譚と日本・中国の「舌不朽」の逸話の構成要素について、いま少し検討を加えてみたい。

i) 死後誦経

先に(1)型としてあげた、『教父伝』第14話は、ただ1つの点を除いては、『弘賛法華伝』の釈慧向の逸話とよく似ている。類似点に着目してあらすじを追ってみると、

- ① いつも同じ聖なる言葉を唱えていた僧が死ぬ。
- ② 墓の近くを人が通りかかると、その言葉にかかわる驚異が起きている。
- ③ 賢者を呼んでくると、花を見て、それが奇跡であることに気づく。
- ④ 掘り返してみると唇と舌だけが残っていて、花はそこから咲いている。
- ⑤ 人々はその遺体を聖なるもののように扱う。

となる。両者の一番の違いは、②の言葉に関する奇跡である。釈慧向のそれは「死後誦経」であり、聞く（読む）者に強い印象を与える。

それに対して、『教父伝』の、「地面にその言葉が書いてある」というのは、奇跡としての説得力に欠け、ありがたみも薄いように思われる。たとえどんなに美しい文字であったにせよ、民衆とは縁のないラテン語で「天使祝詞」の全文が書かれていて、たまたま字の読める子供が通りかかって

発見する、という設定もご都合主義である。(3)型と呼んだ、溺死した僧の逸話で、その辺の溝にでも埋めようとしていた飲んだくれの僧の遺体を、「その口から『天使祝詞』の書かれた紙片が出てきた」だけで、聖遺物のように高く捧げ持って、大行列をつくって運んで、墓地に手厚く葬ったというのも同様である。

大胆な推論が許されるなら、これらは「死んでなお、聖なる言葉を唱え続ける舌」というモチーフの、キリスト教的変容の結果なのではないだろうか。というのは、死体は墓の下で生きており、時には動き回るものだとするゲルマンやローマの伝統の間で、教会は「もし死体が動くようなことがあれば、それは悪霊のしわざである。」と主張してきたからである⁽¹⁶⁾。先に(2)型とした、HM 3を源泉とする物語群で、「舌はかすかに動いて『天使祝詞』を唱えているように人々には思われた」とか、「神と聖母マリアに祈っているかに見えた (A loer Deu e sainte Marie/Estoit molt bien appareille⁽¹⁷⁾)」という形で表現されているのも、同じものなのではあるまいか。

ii) 花

祈りの言葉の象徴としての花はいくつかの聖母奇跡譚に見られるが、この「舌不朽」の逸話が最も古く、これを直接の下敷としたものが多い。この逸話では花の名は言及されていないか百合であるかだが、後には薔薇も多くなる。いくつか拾ってみると、

- Ave Maria の 2 語しか覚えられなかったシト一会士の死後、舌の上にその言葉が書かれており、口から百合が咲いている⁽¹⁸⁾。
- 放蕩で破門された若者が毎日聖母の祈禱文を唱えていたため、聖母のとりなしで墓地に埋葬されることになる。若者の舌から 1 本の薔薇が咲いている⁽¹⁹⁾。

以上 2 話は「舌不朽」のバリエーションと言ってもよいほどだが、1 話目の騎士出身の主人公は、「天使祝詞」さえ覚えられないのに聖母の騎士^{シト一会士}となって死後も恩寵を受け、2 話目の若者に至っては、聖母を敬う気持ちも特にな

く、人に言われて毎朝一度ずつ短い祈禱をただけで、破門の身で救われる。聖母崇敬の高まりと民衆への浸透を示す（あるいは目指す）変容であると同時に、「聖母への祈りを多く唱えること」自体の功德が語られ始めている。花は出てこないが、この話の類話には、聖母に対して篤い崇敬の心を持つわけではない主人公が、毎日50回⁽²⁰⁾、あるいは100回⁽²¹⁾アヴェマリアを唱えて罪を免れるものがある。

- 毎日150回アヴェマリアを唱える習慣だったシトー会士が、それを唱えながら森を通っていくと、1つ1つの祝詞が薔薇の花となり、白鳩がそれをくわえて天へ運ぶ⁽²²⁾。

そしてその薔薇はロザリオ（薔薇の花冠）となって聖母の頭上に現れる。主禱文15回、アヴェマリア150回、栄誦15回を数珠をつまぐりながら唱えるロザリオの祈りの起源を説く逸話である。「祈る時、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聴かれんと思ふなり。」（マタイ伝VI-7）というイエスの言葉を忘れたかのような変貌ぶりである。

一方、『法華経』や『船若経』等の大乘仏典は、これらの経を受持し、読誦することの功德を自ら説く、そして中国や日本の靈驗譚になると、善男善女が、さながら pénitence（贖罪のための難行苦業）のように、一心不乱に経文を唱える。そしてここでも、それが報いられた証として蓮華の花が現れる。

- 八千余遍も涅槃経を講じた釈道愍が死ぬと、遺体は冬の凍土の外に現れ、その周りに蓮華に似た小さな花がたくさん生じた⁽²³⁾。
- 毎月千部ずつ法華経（＝妙法蓮華経）を誦した蓮長持経者が、臨終の床で季節はずれの白蓮を手にしてるので人が問うと、「此レヲ妙法蓮華トハ云也。」と答えて往生した。その蓮華の花も姿を消した⁽²⁴⁾。

仏教説話の「舌不朽」の話においては、「口から花が咲く」というのは不可欠の要素ではないが、それが聖なる言葉を象徴し、救いの証となる点では、聖母奇跡譚と同様であろう。

iii) 舌

エジプトのプタハ Ptah という神は心臓と舌によって世界を産んだ⁽²⁵⁾。即ち精神の力と「産出力を持った聖なる言葉 *logos spermatikos*⁽²⁶⁾」によってである。言葉には力があり、それを唱えるとその名を持つ実体が生じるといふ信仰は、タントラをはじめ、古代世界に広く見られ、新プラトン主義を経由してキリスト教にも持ちこまれた。聖書にある、「炎の舌」の形をとった聖霊の顕現⁽²⁷⁾も、同じ表象であろう。そこでは舌は言葉であり、言葉は創造の力を持った神そのものなのである。

聖なる力を持つ言葉、という観念は中世にも受け継がれ、典礼用語はすべてラテン語のままであった。民衆教化のため、俗語で語られた聖書奇跡譚の中でも、「天使祝詞」は必ずラテン語のまま唱えられた。のみならず、その祝詞が唱えられる「受胎告知 (Annociation)」の場面を描いた聖画には、《Ave Maria gratia plena》という最初の4語が、さながら聖母が主を孕るための呪文のように、ガブリエルの口から出ているさまが書き記された⁽²⁸⁾。

一方、仏教も「聖なる力を持つ言葉」という観念を持っていることは言うまでもない。より古い分化の基層からとり入れたマントラ(真言、呪文)やダラーニー(陀羅尼、聖なる音節)はもとより、『法華経』という經典名を受持するだけで加護を受けたり、『般若経』を読誦し書写することは、釈尊の仏塔を供養するより功德があるとされたりするのも「言葉の力」によるものであろう。奇跡譚に出てくる聖母がどんな慈悲深くとも、聖母による救いは、『今昔』巻七第三話の、震旦の神母(じんも) (=人名)が、「我レ、今日、不祥ノ事ヲ聞キツ、所謂『南無大般若波羅密多経』也」と、さも穢らわしように、怒りながら3度口にした功德で、慈利天(とうりてん)に生まれ変わるを得たなどというものには到底及ぶまい。

『法苑珠林』巻十八において、舌と唇が朽ちずに発見されたのは「此持法華者六根不壞」であるからだと説明されているが、常に不壞のまま残るのは、言葉を発する器官である舌と唇だけである。もちろん、主人公の舌＝言葉に聖なる創造の力があるわけではない。しかし、聖なる言葉を唱えることによって、聖母奇跡譚の枠組で言えば、「腐敗と蛆とを免れ得ない、罪

深い人間の肉体」の中であって、そこだけが浄化されたのである。

主人公の魂が天にあげられ（あるいは往生し）た後も、鮮やかな色をして、かすかに動いて祈り続けるかに見える舌は、主人公の唱えた言葉の聖なる力の象徴であり、残された人々への救いの約束であると言えないか。

VI

『靈異記』や『今昔』は「舌不朽」の出典として、「原拠は梁の高僧伝」までしか挙げていないが、もう少し遡れるように思う。

竜樹が『摩訶般若波羅密經』の註釈書として著した『大智度論⁽²⁹⁾』にこんな逸話がある。

阿弥陀仏經と摩訶般若波羅密經を読誦していた1人の比丘が、自分の死期を悟り、阿弥陀仏の来迎を予言して死ぬ。弟子達が遺体を火葬したが、翌日灰の中を見ると舌が焼けずに残っていた。弥陀の来迎は阿弥陀仏經の舌が残ったのは般若波羅密の功德である⁽³⁰⁾。

この『大智度論』を漢訳したのが鳩摩羅什で、405年頃のことであり、『高僧伝⁽³¹⁾』で一番最初に「唯舌不灰」と記されているのも羅什なので、「舌不壞」というモチーフがここから来ているのは確かであろう。

「枯骨報恩」や「唄う骸骨⁽³²⁾」などの昔話と、『靈異記』等の「髑髏誦經」説話との関係が論議されてきた⁽³³⁾が、唐代の「一夜、詩を吟ずる声を聞いて、後に探してみると一体の人骨があるばかりだった」という逸話⁽³⁴⁾に代表される、「歌や泣き声を聞いて、よくよく探すと髑髏であった」というモチーフ⁽³⁵⁾と、「舌不壞」というモチーフが、土葬という葬制のもとで結びついて、釈慧向の逸話のような形の「髑髏誦經」譚へ発展して行ったのではないだろうか。

だからこそ、それが「髑髏が歌う」というモチーフを共有する日本へもたらされた時、最初こそ「舌不朽」のモチーフも持っていたものの、新たに日本で作られた死後誦經譚⁽³⁶⁾では、不朽の舌の象徴的意味が忘れられ、舌のない髑髏が主人公となったのではあるまいか。

11世紀後半の聖母奇跡譚に先行するヨーロッパの文献が今のところ見あ

たらないことは既に述べた。実際の聖人の「舌不朽」に対する崇敬は、南ボヘミア、ネポムクのヨハネスに対するものがあつたが、1393年に殉教した遺骸と墓とは早くから崇敬されていたが、墓を開くと「舌は乾涸していたが不敗せずに遺っていた⁽³⁷⁾」ことがわかるのは、300年後の1719年になってからである。また、Thompsonの *Motif-index* にも、註(18)に記したWardのカタログに対する言及があるだけである。ヨーロッパにおける「舌不朽」の逸話は、完成した形で突然現れ、民間に広まらないままそのうちに消えて行ったかに見える。

『教父伝』の「舌不朽」の逸話は、『大智度論』のものより、ずっと『弘贊法華伝』の釈慧向の逸話に似ており、しかも中国の文献では、「舌不朽」の逸話の発展の過程がある程度たどれる。この類似は偶然だろうか。或いはあるモチーフが、偶然同様の発展を別々の場所ではげたのだろうか。それとも、直接中国とヨーロッパを結ぶ経路があつたのだろうか。今後の課題としていきたい。

註

フランス語による聖母奇跡譚は次のものを用いた。() 内は校訂者。

○ Adgar *Le Gracial* (以下 Ad と表す)

(Kunstmann, P. 1981 Ottawa)

○ *Deuxième Collection anglo-normande des miracles la Sainte Vierge* (以下 2°)

(Kjellman, H. 1922 Paris et Upsal)

○ バリ国立図書館フランス語写本818番 (以下 B.N. 818) (Kjellman *ibid* 所収)

○ Gautier de Coinci *Les Miracles de Notre Dame* (以下 GC) (Koenig, F. 1955, 61, 66, 70 Geneve) 作品番号は Ducrot のものによつた。

○ *La Vie des Pères* (以下 *Vie*) (Lecoy, F. 1989 Paris) 作品番号は Gaston Paris のものによつた。

(1) 天使祝詞 *Ave Maria* ガブリエルの受胎告知の言葉「めでたし、恩籠に満てるものよ、主なんちと偕に在せり」(ルカ I-28)と、エリザベツの「をんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の実もまた祝福せられたり」(ルカ I-42) を結びつけたもの。

(2) Mussafia, A. が用い始めた略号。最古の複数のラテン語による聖母奇跡

集に共通して現れる17話の物語群。最初と最後の逸話の頭文字をとって名付けられた。

- (3) *Ave sur la langue*. Ad. n° 17, G C n° 44. 2° n° 16
- (4) HM と同様 Mussafia による略語。
- (5) *Sacristain noyé* Ad. n° 2, 2° n° 16, B. N. 818 n° 19
- (6) *Clerc de Chartes* Ad. n° 3, 2° n° 17. B. N. 818n° 32, GC n° 17
- (7) B. N. 818 n° 19及び68
- (8) GC n° 17
- (9) 2° n° 11
- (10)(11) 共に日本古典文学大系によった
- (12) 辻英子「日本靈異記下巻第一話の考察」『芸文研究』第19号 (1965)
- (13) 大正大藏経卷五十一 但しここでは辻氏の論文によった。
- (14) 辻英子 前掲論文
- (15) 宗版磧砂大藏経第三十冊
- (16) 阿部謹也『西洋中世の罪と罰』(1989 弘文堂)
- (17) B. N. 818 n° 32
- (18) 大英博物館 (以下 B. M.) ラテン語写本
Royal 5 A viii n° 21 Ward, H. L. D. 及び Herbert, J. *Catalogue of Romances in the department of Manuscripts in the British Museum* (1893 London) 以下, ラテン語写本に関しては主としてはこれによった。
- (19) GC n° 41
- (20) B.M. Additional 1990 1 n° 38 他
- (21) B.M. Additional 15723 vol. II n° 35 他
- (22) B.M. Egerton 1117 n° 17 他
- (23) 『今昔物語集』卷七第四十一話 出典は『法苑珠林』卷第廿二 (原拠は唐『高僧伝』)
- (24) 同上卷十三第廿八話
- (25) Lurker, M.『聖書象徴事典』(1988人文書院)
- (26) Waiker, B.『神話・伝承事典』(1988 大修館書店)
- (27) 使徒行伝 II-3
- (28) Waiker 前掲書
- (29) 宗版磧砂大藏経第十四冊
- (30) 三枝充恵『大智度論の物語』(1973第三文明社) 第一巻 によった。
- (31) 宗版磧砂大藏経第三十冊
- (32) 「枯骨報恩」は他人に供養してもらうなどした骨が恩返しをし, 「喰う骸骨」はグリムの『喰う骨』同様, 殺した人に復讐する。関敬吾『日本昔話大成』(1979) 参照

- (33) 今野達「〈枯骨報恩〉の伝承と文芸（上）」『国文学 言語と文芸』第47号（1966）
- (34) 牛肅『紀文』前島直彬編 『唐代伝奇集 2』（1964 平凡社）所収。
- (35) これは（32）にあげたどちらの型の話の発端にもよく現れる。
- (36) 『法華験記』上巻第廿二話，中巻第六十四話 等。
- (37) 『カトリック大事典』（1956 富山房）